Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

都心の地下に眠っていた遺跡たちの物語…

平成29年度企画展示

東京 TOKYO★Excavation 発掘

江戸っ子のくらしと文化

始まる!!

東京都埋蔵文化財センター報 108

「江戸遺跡」調査のあゆみ

調査研究部　調査担当課長　山口　慶一

「江戸遺跡」は朱引内（幕府が文政元年に定めた江戸の範囲）ですら、昭和59年までは一部の例外を除いて、埋蔵文化財調査の対象範囲外でした。1980年代以降議論が積み重ねられ、東京に関しては江戸市街を「江戸遺跡」として周知化し、周辺（郊外）の地域については、「近世遺跡」として別途定める対応がとられるようになりました。

「江戸遺跡」の発掘調査は、昭和50年の都立一ツ橋高校遺跡を嚆矢として、東京都教育委員会及び関連区（千代田・中央・港・新宿・豊島・文京・葛飾・墨田・江東等の各区）により精力的に実施され、これまでに多大な成果が蓄積され、これらの成果は「近世考古学」という考古学の一分野を樹立させ、近世史の研究に大きく貢献してきました。

当初の「江戸遺跡」の調査体制は、行政が任意団体である遺跡調査会を設けて直接実施することが一般的でしたが、調査会制度の見直しや区教育委員会担当職員の人員削減等から、行政による直接的な調査体制を維持することが困難な状況になる一方で、平成10年以降における政府の行政分野への民間活力の導入方針のもと、民間調査組織の参入が相次ぎ、その調査事例も増加する傾向にありました。

この結果、行政が直接的に調査を実施せずに民間調査組織の指導・監督のみを行うといった調査体制上の大きな変化をもたらしましたが、人員削減の進む行政サイドでは、複数の民間調査組織の指導・監督を十分に行なえず、調査内容・精度の維持に苦慮しているという状況でした。

この中にあって当センターは、防衛庁（当時）の庁舎新営に伴う市谷本村町遺跡、都庁舎の移転に伴う丸の内三丁目遺跡、日本国有鉄道等による汐留地区再開発事業における汐留遺跡等の平成3年度の調査以来、「江戸遺跡」の調査に参画し、これまでに大小さまざまな規模の調査を実施してきました。

当センターは、調査にあたって東京都教育委員会の作成した積算基準・作業標準をもとに事業費の確実な予算立てをし、安全を遵守した作業に心がけて事業を行い、あわせて調査精度にも留意し、確実な成果を蓄積してきました。なかでも市谷本村町遺跡や汐留遺跡等の大規模調査の実績と成果は、江戸時代に関わる調査における指標となる資料として、「江戸遺跡」を語る上で欠かせぬものとなっています。

当センターの実施した「江戸遺跡」の調査は、当初は公共的事業における調査が主体でしたが、後年には旧防衛庁跡地や旧日本テレビ跡地のような民間事業による調査も手がけ、さらには都道・公共施設等の改修等に伴う中小規模の調査が増加しました。

バブル期以降、増大した都心部における開発行為による遺跡調査件数の増加によってもたらされた「江戸遺跡」の調査成果（資料）の蓄積・江戸の考古学の発展は、大名・旗本屋敷、御家人の大縄地、寺社地（寺院・墓地跡）、町人地等の町割から見られる都市江戸の構造と市街地の拡大、上水井戸及び木樋から推定される上水道網・街道のあり方から見た社会資本の整備・充実等の変遷、屋敷地における建物・施設の配置から見た土地利用のあり方、基礎・下部構造から推定される建物の構造、出土する陶磁器・土器・石製品、商品の木札（荷札）、植物種子や獣骨・魚骨等の食物残滓から考えられる食と流通の問題等、考古学の対象とする時代・遺物の種別の拡大のみならず古文献・古絵図あるいは説話・伝承を参照とし検証することから、写真資料・現代の民具にいたるまで比較研究の領域は拡大し、自然科学との連携等学際的な研究の必要性も増し考古学の対象とする領域と可能性を拡げることとなりました。

私達の記憶は時として曖昧です。物質として残存した考古資料がそれを補完し、時代の新旧・近遠を問わず、当時の社会・集団・生活のあり方を復元する極めて有効な手段・方法であり、既調査資料の再評価を含めて多くの可能性を秘めていることを「江戸遺跡」の調査は私達に改めて教えてくれました。

これまでに累積した「江戸遺跡」の調査成果に関する今後の活用は、考古学の分野に留まらず、地域・郷土史、生涯学習、学校教育の範疇に至るまで、網羅できるものです。

さらに、江戸時代に続く近代以降については一部を除いて、現在までのところ埋蔵文化財調査の対象とはなっていませんが、東京（江戸）市街が大きく変容したのは、関東大震災以降であることが明らかになりつつあります。このため近代においても江戸の残影が色濃く残っており、鉄道開業期の汐留遺跡の調査をはじめとして近代国家日本の成立に関わる遺跡についても、周知化し調査の対象としようとする潮流が出て来ていることも注目されます。

平成 29 年度企画展示

『東京発掘 江戸っ子のくらしと文化』へのご招待

東京都埋蔵文化財センターは、もともと、多摩ニュータウン遺跡発掘のために立ち上げられた組織です。しかし、平成に入り、ニュータウンの発掘ラッシュが落ち着いてくると、多摩の地を離れて調査することが多くなりました。特に、都心部では大規模な再開発に伴う調査がいくつも持ち上がり、多くの職員がこれに従事することになりました。

私たちが、そこで出会ったのは、都市江戸の痕跡＝「江戸遺跡」でした。ニュータウンで先史時代を中心に調査してきた私たちにとって、「江戸遺跡」と向き合うことは大きな挑戦でした。中世までの遺跡に比べると格段に多い遺構と遺物に圧倒され、その中からどのような情報を取り出し、報告するか、試行錯誤を繰り返しました。しかし、その甲斐あって、江戸時代研究にとって新たな進展をもたらす「実物」資料が着実に蓄積されていきました。

今年度の企画展示は、この四半世紀以上にわたる「江戸遺跡」調査の成果をテーマにした『東京 発掘ー江戸っ子のくらしと文化ー』です。展示の構成は以下の通りです。

Ⅰ 江戸を造った技術

【台場を掘る！】黒船来航に危機感を抱いた幕府が 10 か月余りの短期間で築いた品川第五台場（人工島／砲台）。日本古来の造成・築城技術で西洋式要塞を造り上げた技術力を、生の資料で感じて下さい。

品川第五台場遺跡の石垣

Ⅱ 日常生活の多彩さ

【考古版江戸世帯道具尽くし】江戸時代の刷り物「おもちゃ絵」になぞらえて、暮らしの道具を集めました。質・量ともに多彩になった日常の道具に、生活の豊かな広がりを重ねてみて下さい。

【江戸食べ物事情／壺塩屋ブランド大合戦】食品容器に記された「文字」から、食とその周辺に迫ってみました。全国各地から集まる珍味や調味料。中には驚きの食材も…。

Ⅲ 豊かさがもたらすもの

【江戸のたしなみ】江戸時代には、また、並々ならぬこだわりをもった品々が登場します。漆芸、金工、ガラス細工等、様々な工芸文化の花が開きました。その技術と江戸の「粋」を堪能できる遺物を集めました。

尾張藩上屋敷跡遺跡出土の目貫（刀装具）

【神よ！仏よ！】災いを避けたい、もっと幸福になりたい。豊かになったからこそ、人々の願いも広がります。八百万の神様に阿弥陀様。修験道に陰陽道。様々な信仰の要素が盛り込まれた江戸の「まじない」をご紹介します。

【子供の成長と遊びの道具／江戸市中のペットたち】玩具類、ペットにまつわる品々を展示しました。日々の糧を得るための戦力にならない子供やペットですが、これらを可愛がり、愛情をかける江戸の人々。泰平の世がもたらした安定と豊かさが、その余裕を生みました。

Ⅳ 成長する江戸

【拡大する流通ネットワーク】江戸は当時世界でも有数の人口を擁する都市でした。そこに成立した巨大市場に参入すべく、各地から物産が流入します。やきものを例に、いかに遠くからも江戸を目指して物産がもたらされたかお目にかけます。

これらの遺構や遺物の背景にある技術や文化、例えば、インフラ整備力の高さや「粋」という美意識などには、現代に繋がる要素がたくさんあります。遺跡のあった場所が、東京国際フォーラム、汐留シオサイト、東京ミッドタウンなどとして再開発され、現代東京を体現する注目のスポットとなっていることを考え合わせると、まさに『東京 発掘』、感慨深いものがあります。（両角まり）

東京都埋蔵文化財センターと

他館との連携事業の報告 2016

2016 年度の後半に実施した他館との共催事業から、ここでは多摩動物公園、港区教育委員会との共催事業を取り上げて紹介します。

多摩動物公園との共催事業「縄文人がやってきた！縄文人の森の暮らし」は、秋も深まった 11 月 23 日に多摩動物公園内のワシ・タカ広場で開催しました。森の恩恵を受けて暮らしていた縄文人にとって、森で獲(と)れる木の実や動物は生活に欠かせない存在でした。多摩動物公園内には多摩丘陵の自然が色濃く残されており、このイベントを行うには絶好の場所と言えます。今回は体験などをつうじて、縄文人と森との関係や動物とのつながりを少しでも知ってもらうことを趣旨としています。イベントは同園の入園者を対象とし、誰でも参加しやすいように気軽にできる体験コーナーを用意しました。

イベント当日は、縄文服を試着できる「縄文コレクション」、「ドングリアート」や「ドングリすりつぶし」などの各体験コーナーに加え、縄文人の狩りの様子を紹介するパネルや動物の骨格標本、毛皮の展示も行いました。「ドングリアート」はドングリに動物のフットプリント（足跡）を描く体験で、縄文人とかかわりの深いイノシシ、シカ、ノウサギ、タヌキなどの動物を選びました。普段の生活で動物の足跡を見る機会はほとんどありませんが、縄文人にとって地面に残された足跡は動物を見つけるための重要な手がかりだったはずです。

「ドングリすりつぶし」コーナーでは、体験用の磨石(すりいし)・石皿(いしざら)を使い、実際にドングリをすりつぶす体験を行いました。縄文時代の遺跡からよく発見される磨石と石皿、現在の道具に置き換えると、すりこぎと擂鉢(すりばち)にあたります。磨石を使ってすりつぶすには意外とコツがいるようでしたが、一度コツをつかむと「すりぶつす」ことに夢中になり、大量のドングリ粉を作った小学生もいました。

「ドングリすりつぶし」を体験中！

毛皮の触り心地は・・・？

パネルなどの展示スペースにはツキノワグマやニホンジカ、イノシシなどの毛皮も並べました。動物園では動物を見ることはできますが、動物の毛皮に実際に触(さわ)れる機会はなかなかありません。ある親子連れはそれぞれの毛皮を触り比べて、毛皮の感触の違いや使い方について意見交換する様子も見られました。

港区教育委員会との共催事業「土曜体験教室」は 11 月・2月に勾玉(まがたま)作りを、1月・3月に耳飾り作りをそれぞれ実施しました。会場は港区立三田図書館で、同じ建物には郷土資料館もあり、港区内の遺跡から出土した勾玉などを見学することができます。この体験教室では、古代のアクセサリーの歴史を学んだあと、製作に入ります。使うのは滑石(かっせき)という軟らかい石材で、砥石(といし)や紙やすりで簡単に削ることができます。参加者は一般の方もいますが、保護者と一緒に参加する低学年の小学生も多くいます。自分の手よりも大きい砥石を使いながら一生懸命に作る姿が毎回とても印象的です。歴史の授業はまだ受けていなくても、歴史に触(ふ)れる楽しい経験になったのではないでしょうか。（小西絵美）

勾玉の曲線がうまく削れるかな…

遺跡だより 112

八王子市　中田遺跡

所在地：八王子市中野山王 3-2349-1 ほか
調査期間：2016 年 6 月～ 2017 年 1 月
調査面積：4,200 ㎡

中央高速道路八王子インターチェンジを下り、国道 16 号線を八王子市街へ向けて南下すると、途中浅川と川口川の合流点付近を通過します。合流点から、川口川を１km ほど遡った微高地に、中田遺跡があります。昭和４１年から翌年にかけて、都営団地建設に先立って調査が行なわれ、古墳時代後期から古代の成果が注目を集めました。

東京都埋蔵文化財センターでは都営団地建替えに伴って、平成１９年度から調査を行なっています。「たまのよこやま」では７４号、７５号の２回にわたり、中田遺跡で見つかった縄文時代から平安時代にかけての成果をご紹介しました。今回は、平成２２・２３年度調査、平成２８年度調査の成果をもとに、中世・近世の中田遺跡についてお話したいと思います。

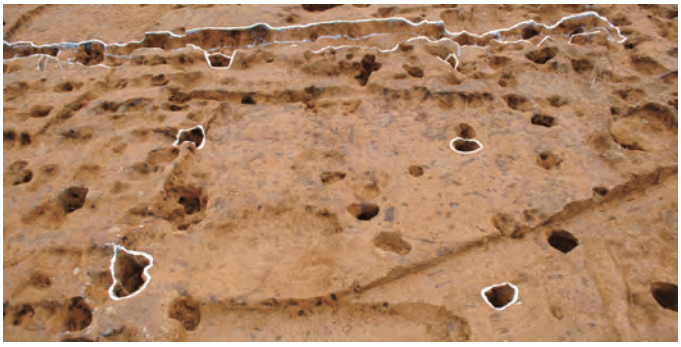
古代までは集落として利用されていた中田遺跡ですが、中世以降はやや様子が変わってきます。微高地を南北に貫く大溝（SD-2）が見つかり、その溝を挟んで東西に掘立柱建物跡が検出されました（SB-9 ほか）。東西それぞれの掘立柱建物はほぼ同時期に存在し、１３世紀から１４世紀の屋敷跡と考えられます。さらに、屋敷跡は大溝と軸を同じくしており、大溝がこの土地を区画していたと考えられます。

大溝の底面から、石敷きや硬化した面が確認されました。これらは道路跡と考えられます。この道路跡からは中世前半の遺物が発見され、屋敷跡が廃絶される前後から利用され始めたことが窺えます。また、大溝が埋まる過程で、砂や拳大の川原石を敷いた別の道路跡（SF-1）が作られていたこともわかりました。少しずつ姿を変えながらも、道路として維持されていたと考えられます。

注目すべきは、明治初め頃の地籍図に描かれた道路や河川と、遺跡から発見された道路跡や河川跡が一致する点です。溝の北端で二股に分かれた道路跡や河川跡、南の川口川沿いの道路跡も発掘調査によって検出されました。

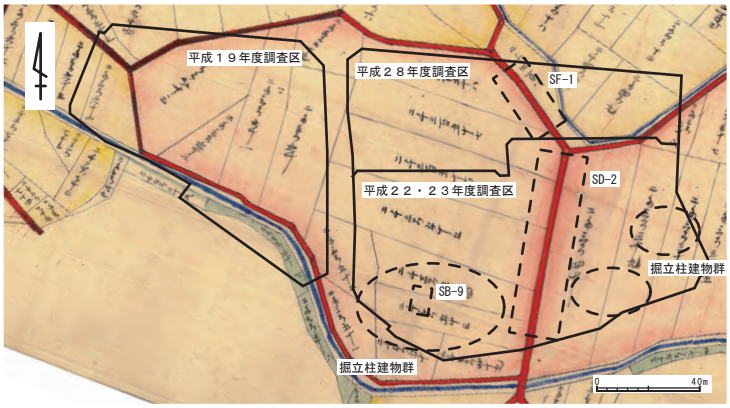
中世前半に作られた大溝が、道路に変化しながらも、数百年にわたって継続的に利用されていたことは、中世の土地利用概念が数百年にわたり生きていたとも言えます。どのような経緯でその概念が生きてきたのか、現在行なっている平成２８年度調査の整理作業を通して考えていきたいと思います。

（山﨑太郎）



掘立柱建物跡（SB-9）

近世の道路跡（SF-1）



地籍図（野嶋和之氏所蔵）と調査範囲

中世の大溝（SD-2）

かゆい所に手が届く
遺物の基本的な見方　縄文土器編④

縄文土器には、時代や地域によってさまざまな文様が施されています。なかには「いったいどのように作ったのだろう？」と首をかしげるほど、複雑で繊細な文様もあります。しかし縄文土器を細かく観察してみると、どのような文様も一つ一つ順を追って人の手で作られていることがわかります。この「文様が施された順番」を、考古学の用語では「施文順序」と呼んでいます。今回は縄文土器の「施文順序」に着目し、文様のメカニズムに迫ってみましょう。

縄文土器の施文順序は、文様どうしが重なる場所をよく観察すれば読み取ることができます。新しい文様は古い文様の上に描かれるため、その重なり合いから二つの文様の新旧を決めることができるわけです。図１は、施文順序の一例を模式的に示したものです。遺跡から出土するのは大半が④の完成した土器ですから、施文順序は④の観察を通して時間を巻き戻して考える作業となります。

実際の土器を例にとってみましょう。図２のＡは、土器の表面全体に縄文を施した後、波状の沈線文が描かれています。次に図２のＢは、細い粘土紐を貼り付けて区画を作った後、区画内に二枚貝の貝殻で引いた条痕文を埋め込んでいます。そして図２のＣでは、斜めに沈線文を描いた上に、円形の粘土粒を貼り付けています。これらの順番は、いずれも文様どうしの重なり合いを観察することでわかる事実なのです。

土器というキャンパスを目の前にして、「どこから装飾を始めるか」という点はとても重要です。というのも、同じ型式の土器は同じ施文順序で作られることが多いからです。ここから施文順序は、集落をこえて一定の人びとに共有された知識だったと考えられます。面白いことに、外見の似た土器でも、本拠地と遠く離れた地域では異なる施文順序で作られたものもあります。

土器づくりの「生きた情報」の一つをあらわすかもしれない「施文順序」。ぜひ当センターで「じっくり」「間近に」土器を観察し、縄文人の手仕事を感じてみてはいかがでしょうか。　（大網信良）

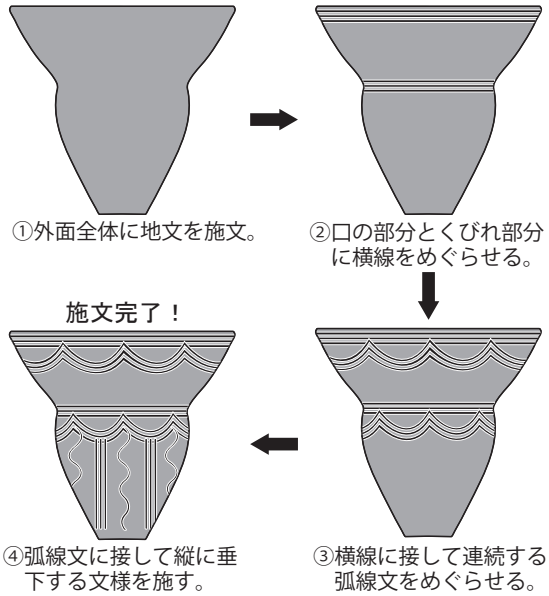
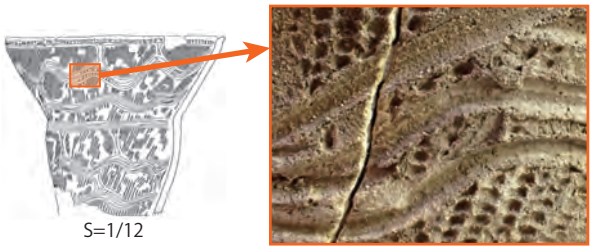


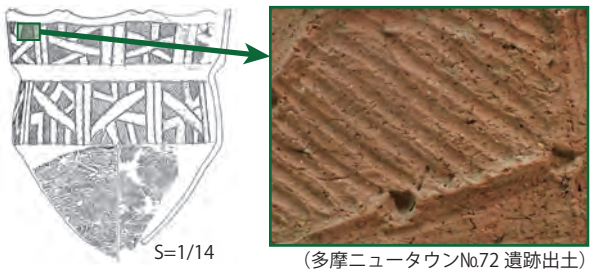
図１　施文順序の模式図

A　縄文中期・連弧文土器（約 4,200 年前）の場合
縄文の「粒」が沈線文によってつぶされています。



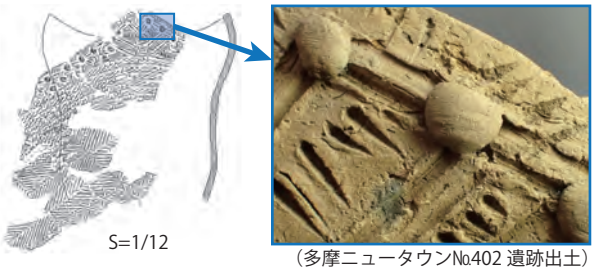
（多摩ニュータウンNo.9 遺跡出土）

B　縄文早期・鵜ヶ島台式土器（約 7,500 年前）の場合
粘土紐の上から貝殻条痕文が引かれています。



（多摩ニュータウンNo.72 遺跡出土）

C　縄文前期・関山式土器（約 6,100 年前）の場合
中央下の灰色部分は、円形の粘土粒がはがれたところです。
粘土粒の下にも沈線文が施されているのがわかります。



（多摩ニュータウンNo.402 遺跡出土）

図２　施文順序のいろいろ

1/964

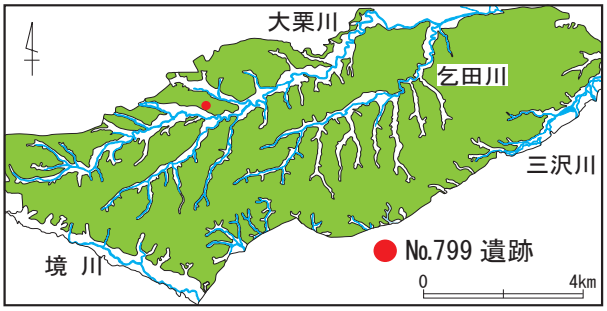
多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃33 多摩ニュータウン No.799 遺跡

多摩ニュータウンNo.799遺跡は、東京都八王子市越野にあり、大栗川北岸（左岸）の南向きの沖積緩斜面から丘陵裾部にかけて立地しています。面積は、33,450㎡を有し、海抜標高は90.8～106.0ｍを測ります。遺跡と大栗川との間には、野猿街道が川沿いを走っています。

本遺跡は、昭和56年８月から平成３年３月までに10回に分けて調査が行われました。その結果、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることがわかりましたが、その中心は中・近世で、掘立柱建物や地下式坑・井戸・土坑・墓壙といった遺構が数多く見つかりました。

また、『新編武蔵国風土記稿』にもその存在が記載されている導儀寺という寺院跡も調査されました。



遺跡の位置

現在は閑静な住宅街となっている調査地ですが、多摩ニュータウンの開発が始まる頃までは、蛇行する大栗川に隣接して水田が営まれ、丘陵裾部には屋敷と畑が散在し、背後の丘陵は雑木林で覆われるといった多摩丘陵のどこにでも見られるような風景が広がっていました。このような景観は、おそらく近世には形成されていたのでしょう。

1984年度調査Ａ地点検出の掘立柱建物群

今回は、この遺跡から出土した砥石の話をします。1984年に調査した５地点では、近世から近代の砥石が83点も出土しました。石材は大部分が群馬県甘楽郡南牧村砥沢に産出する砥沢石で、岩石学的には流紋岩といわれるものです。

砥石は研ぐ対象により、砥石を据え置く場合と手に持つ場合とがあります。砥石そのものも置いて使う砥石と持って使う砥石とでは形が少し違います。前者では置いた時に安定するように幅が広めであるのに対して、後者では持ちやすいように幅の狭いものが使われます。当然のことながら砥石は使えば使うほど研ぎ減りし、小さくなるとともに形も変わります。

一般的に置いて使われる砥石では、使用面の中央が徐々に窪み、緩やかな凹面となるのに対して、手に持って使う砥石では、使用面の両端がより多く磨り減り、凸面となる傾向があります。また、持って使う砥石では、使用者が磨る際に加える力の方向と砥石の長軸方向とが平行とはならず微妙にずれるため、使い込まれた砥石はねじれるように変形していきますが、そのねじれ具合は、利き手を反映し右手と左手とでは逆になります。

本遺跡で出土した砥石の中で持って使われたと思われる砥石の内、ねじれ具合から右利きの人が使ったと推定できる砥石は18点であるのに対して、左利きの人の砥石は４点でした。これらの砥石は基本的には個人使用なので、このような利き手の違いが現れるのでしょう。

インターネットで調べると、右利きの人と左利きの人の割合は、おおよそ９対１だそうです。最近では少数者である左利きの人のために作られた道具も開発・販売されていますが、それを意識した取り組みは、そう古いことではありません。遺物に遺された製品や使用痕にみえる利き手の研究は、まだまだ追究し甲斐のある課題の一つです。　（小島正裕）

平成29年度　行事のご案内

催　事　名	対象／人数	日　　時		備　　考
東京都埋蔵文化財センター主催 文　化　財　講　演　会	一般/先着100名	第1回6/24（土） 第2回9/30（土） 第3回11/23（木・祝）	午後　13:30～15:30	当日受付
東京都埋蔵文化財センター・ 多摩市教育委員会主催 文　化　財　講　演　会	一般/先着100名	第1回2/7（水） 第2回2/14（水） 第3回2/24（土）	午後　13:30～15:30	当日受付
遺跡発掘調査発表会	一般/先着100名	3/21（水・祝）	午後　13:30～15:30	当日受付
展示説明会	一般/参加自由	3/21（水・祝）	午前　10:30～11:30	当日受付
映像上映会	親子・一般/参加自由	1/20（土）	午後　13:30～15:30	当日受付
自然観察会	一般/20名	①4/15（土） ②10/7（土）	午前　10:00～11:30	往復はがきで申込み ①4/3 ②9/25必着
縄文土器作り教室	①②親子15組 （小学4年生以上） ③一般25名	製作　①7/22（土） ②7/23（日） ③9/2・3（土・日） 野焼き　①・②共8/19（土） ③9/23（土・祝）	製作 午前　9:30～午後　16:00 野焼き 午前　9:30～午後　13:30	往復はがきで申込み ① ②7/10 ③8/21 必着
土偶作り教室	①親子15組 （小学4年生以上） ②一般30名	①8/2（水） ②10/21（土）	①午前　10:00～12:00 ②午前　10:00～午後　15:30	往復はがきで申込み ①7/19 ②10/10必着
縄文アクセサリー作り教室	①③一般30名 ②　親子15組 （小学4年生以上）	①7/1（土） ②8/16（水） ③1/13（土）	①・②午前　10:00～12:00 ③午後13:30～15:30	往復はがきで申込み ①6/19 ②8/2 ③1/4 必着
勾玉作り教室	①親子15組	①8/9(水)	①午前10:00～12:00	往復はがきで申込み 7/26必着
コハク勾玉作り教室	①②一般20名	①6/3(土) ②10/7(土)	①午前　10:00～12:00 ②午後　13:30～15:30	往復はがきで申込み ①5/22 ②9/25必着
古代の糸作り教室	一般20名	6/17（土）	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 6/5必着
古代の布作り教室	①一般30名 ②親子15組 （小学4年生以上）	①5/13（土） ②8/9（水）	①午前　10:00～12:00 ②午後　13:30～15:30	往復はがきで申込み ①5/1 ②7/26必着
火おこし道具作り教室	親子15組 （小学4年生以上）	①8/2（水） ②8/16（水）	午後　13:30～15:30	往復はがきで申込み ①7/19　②8/2 必着
トンボ玉作り教室	各時間帯　一般6名	①5/27（土） ②7/8（土） ③12/9（土） ④2/3（土）	午前　9:30～11:00 午前　11:00～午後　12:30 午後　13:30～15:00 午後　15:00～16:30 の希望する時間帯	往復はがきで申込み ①5/15②6/26 ③11/27 ④1/22 必着
縄文の貝輪作り教室	一般15名	11/18（土）	午後　13:30～16:00	往復はがきで申込み 11/6必着
ワークショップ 「江戸の泥めんこを作って、遊ぶ」※	①親子10組 ②一般20名	9/10(日)	①午前10:00～12:30 ②午後14:00～16:00	往復はがきで申込み ①②8/28必着
縄文食体験	一般10名（各日） 親子10組（各日）	①10/14（土） ②10/15（日）	午前　10:00～午後　13:00	往復はがきで申込み ①②10/2 必着
考古学実習①-土器拓本・断面図-	一般10名	10/28（土）	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 10/16 必着
考古学実習②-石器観察・実測-	一般10名	11/11(土)	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 10/30 必着
考古学実習③-カマド・古代食体験-	一般・親子計20名	11/25(土)	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 11/13 必着
縄文ワクワク体験まつり	参加自由	5/3（水・祝）・4（木・祝）	午前　10:00～午後　16:00	当日受付（勾玉作りは予約制）
遺跡庭園であったまろう！	参加自由	12/17（日）	午前　10:00～午後　15:00	当日受付
考古学相談室（夏休み自由課題）	参加自由	通年（土日は除く）	午前　10:00～午後　16:00	受付随時

※印は新規行事

●往復はがきでのお申込みは、行事名・住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、
〒206-0033　多摩市落合1-14-2　東京都埋蔵文化財センター「〇〇〇(催事名)」係宛　まで。
なお、応募者多数の場合は、抽選になります。

●「一般」は中学生以上、「親子」は小学4年生以上の親子。　一般対象の催事は、お一人につき1通の往復はがきが必要です。
親子対象の催事は、代表者のほか、必ず参加者全員の氏名・年齢もご記入のうえ、お申込みください。

●ご記入いただいた個人情報は、該当事業実施のための案内のみに利用します。利用目的にご同意の上、お申込みください。

お問い合わせ先（平日のみ）：東京都埋蔵文化財センター　経営管理課　広報学芸担当
電話　042－373－5296　　http://www.tef.or.jp/maibun/

たまのよこやま 108　　2017 年 3 月 31 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/